

【大意】 (初三句は序) 一寸逢ふ人を戀しく思ふのは何故だらう。流布本に依れば、一寸逢ふ人を何故戀ひつゞけることであらう。

藤原忠行

君といへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしげなく燃ゆるわが戀

【語釋】 ○見まれ見ずまれ 見るにもあれ。見ないにもあれ。見ても、見なくても。 ○ふじのねの 富士の嶺の。「燃ゆる」にかゝる枕詞。富士山は當時噴火してゐたのである。 ○めづらしげなく。珍らしげもなく。いつでも。 ○作者忠行は有貞の子。延喜六年に若狭守になつた人。

【大意】 あなたの事と云へば、逢ふにつけ、逢はぬにつけ、いつも私は戀ひ焦がれてゐます。

伊勢

夢にだに見ゆとはいははじあさなあさなわが面影にはづる身なれば

【語釋】 ○見ゆとはいははじ。「見ゆ」は人に逢ふ事。あなたとは夢の中でも逢ふたさは私は云ふまい。流布本には「見ゆとは見えじ」とある。「見え」は人に見られる事で、あなたが、私と逢つたとは夢にも見て頂きますまいの意。 ○あさなあさな 毎朝。 ○わが面影にはづる身なれば 鏡に映る姿が餘りに變れてゐる爲に、自分で恥しくなる身だから。「あさなあさなわが面影……」とあるので、面影は女が朝の身端に衣や髪を調へる時に、鏡に映つる影と解する事が出来るのである。

【大意】 現實にはもうお目にかゝりませぬ。否夢の中にでも私は、あなたにお目にかゝるとは申しますまい。毎

朝鏡に映る姿の餘りにも變れてゐるのに、自分ながら恥しくなるのですもの。どうしてお目にかゝつたり出来ませうよ。

素性

今こむといひしばかりに九月のありあけの月を待出づるかな

【語釋】 ○いひしばかりに 云つただけの爲に。 ○ありあけの月 夜が明けてからある月。 ○待ちぞ出づる 待つてゐる中に出る。(出るのと待つとのとは違ふ。「待つ」が主で、「出づる」は従である)。

【大意】 すぐ参りませうと君が云つたばかりに、この夜の長い九月の夜を眠りもせず待ちに待つて、とろ／＼君を待ち得ず、却つて有明の月を待ちつけてしまった。(技巧も勝れてゐる。いゝ歌である。百人一首に入つてゐる)。

讀人しらず

月夜よし夜よしと人に告やらばこてふに似たり待たずしもあらず

【語釋】 ○月夜よし夜よし 月夜よし／＼と語を重ね、下の「月夜よし」の「月」を略したのである。 ○こてふ 来いといふ。「こ」は來(加行變格活用)の命令形。「てふ」「といふ」の約言。

【大意】 いゝ月夜です、と人に通知をすると、お出でなさいと云ふのに似て居る。お出でなさいと云ふのではないけれど、かういふ便りをする時、ひよつとして来るかも知れない、と思ふと心待ちがせられる。集巻六に

わが宿の梅咲きたりと告げやらば来ちふに似たり散りぬともよし
と云ふのがある。この歌を土臺にして詠んだ歌であらう。

○
きみこそは聞へもいらじこむらさきわが本結にしもはおくとも

【語釋】 ○聞 寢室。寢床。 ○こむらさき 濃い紫。もとゆひの色。 ○わが本結にしもはおくとも。黒髪を結んである濃紫の本結に夜が更けて霜が置くとも。紫、黒、白、霜と三つの色を対照して用ゐてゐる。一説に、濃紫の本結は、元服の時に用ゐるものであると云ひ、霜が置く、を、白髪になるの意とし、黒髪が白髪になるまでも、あなたの来るのを待つて居らうと云ふ意に解する。が猶前説がいゝと思ふ。 ○讀人しらずの歌。

【大意】 あなたが来られない以上、私は聞へも入らずに外で待つて居りませう。濃紫の元結に白く霜が置いて、聞へ入らずに待つて居りませう。

○

梓弓ひき野のつゞらすつひにわがおもふ人にことのしげけむ

この歌は、ある人のいはく、あめのみかどの、近江の采女に給ひけるとなむ。

【語釋】 ○梓弓 「ひき」の枕詞。 ○ひき野 河内國日置(今はヘキと云つてゐる)。 ○つゞら 暮ること。「梓弓ひきのつゞら」は第三句以下の「すま……しげけむ」にかゝる序詞。 ○すま 「つゞら」を受け、將來、行く末の意。 ○ことのしげけむ。「こと」は言。世間の噂。「しげけむ」は繁けむ。繁りあるだらう。 ○この歌は云々 例の左註である。「あめのみかど」は一説に天智天皇ともいひ、又一説には聖武天皇と云ふが、明でない。

○

【大意】 (梓弓ひきのつゞら)は序詞。行く末には、きつと、私の思つてゐるあなたの方に、うるさく浮名のたつことであらう。

業平朝臣

かずかずにおもひおもはずとひ難み身をしる雨はふりぞまさらむ

【語釋】 ○今まうでく「今」は今すぐに。「まうで」は詔。「く」は來の終止形。今すぐ參る。 ○雨のふるをなむ 流布本には「雨

のふりけるをなむ」とある。清輔本には「あめのふりげなるをなむ」とある。「雨が降りさうなのを」とある。これに依れば敏行が手紙を書いた時はまだ雨が降つてゐなかつた意になる。○みわづらひ侍る 見合せて。行かうか行くまいかと思つて躊躇してゐる。○かずかずに くれぐれに、次の「おもひ」にかゝる。こゝでは、深く本當に云ふ程の意。古今集卷十六の「かずぐにわれを忘れぬものならば」の歌の條参照。○おもひおはず あなたが私を思つてゐるのか居ないのか。○とひ難み。「み」は形容詞の語根に添うて「の故に」と云ふ意になる。問ひ難いので。○身をしる雨 自分がどの程度に人から思はれて居るか身の程を知る雨——深く愛されてゐるなら雨が降つても男は来るであらうし、本當に愛されてゐないのなら、男は来ないだらう。○ふりぞまさらむ。「らむ」は推量の助動詞。降りまさるであらう。流布本には「ふりぞまされる」とある。降りまさつてゐる。

【大意】 藤原敏行が業平の家の女と戀愛關係を結んで、手紙を送つた、その言葉に、今すぐ參る、(が)雨が降るのを躊躇してゐると云つてあつたのを業平が聞いて、その女に代つて詠んだ歌。——本當に私を深く思つてゐて下さるのか、思つては下さらぬのか、お問ひしにくいので、迷つてゐるのですが、今日は、私がどの位にあなたに思はれてゐるかを知るべき雨が、降りまさる事でしやうよ。(この歌も詞書伊勢物語に出てゐる)

○
女の、業平所さだめずありきすと思ひて、よみてつかはせりける

よみ人しらず

大幣のひくて數多になりぬればおもへどえこそたのまざりけれ

【語釋】 ○所さだめずありきす。何處も定めずに氣の向いた方に、あちこちに愛人をつくる。「ありきす」は歩く。○大幣の「ひくて數多」の枕詞。大幣は大勢が手んで引くものである。業平が多くの女の引張り合ひになつてゐるのを譬へた語。○えこそたのまざりけれ。頼みに思ひ得ない。(この歌伊勢物語に出てゐる)

【大意】 業平が氣の向くまゝに彼方此方の多くの女と關係すると思つて、或る女が詠んで業平に送つた歌——あなたと契を結ぶ女が澤山になつたから、私はあなたを、淺からず思つてはゐるけれど、ひたすらに頼みに思ふ事は出来ません。

○
題知らず

よみ人しらず

すまのあまのしほやく煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり

【語釋】 ○すまのあまのしほやく煙風をいたみ 初句、元永本には「すまのうらに」とあるのであるが、流布本を初め、諸本多く「すまのあまの」とあり、この方が意味がよく通るから、これに従つておく。「すま」は攝津國武庫郡の海岸。「風をいたみ」は風が強く吹く爲に、この初三句は次の「思はぬ方にたなびきにけり」の序詞である。○思はぬ方 本人の希望せぬ方向。○たなびく「た」は接頭語。靡く。

【大意】 (初三句は序詞) 本人が希望してゐない方向へ靡いてしまった。(思ふが他から強要せられて他の男の方へ行つてしまった)。

【餘言】 この歌も伊勢物語に出てゐる。「昔、男、戀にいひ契りける女の、ことざまになりければ」とあつて、

「須磨の海人の云々」とある。因に萬葉集卷七に、

志珂の白水郎の鹽焼く煙風をいたみ立ちはのぼらず山にたなびく

と云ふのがある。調子も内容も殆んど同じである。これから轉じたのであらう。

○ 素 性

そこみなき淵やはさわぐ山がはの浅きせにこそうはなみは立て

【語釋】 ○そこみ。流布本には「そこひ」とある。「ひ」の方が正しい。萬葉集卷十五に「安米都知乃 曾許比能字良爾 安我其等」

久 伎美爾故布良牟 比等波左爾安良目」とある。至極、感まりの意。○淵やはさわぐ 淵は風波が立つて騒ぐだらうか、騒

がない。○山がは 山の間を流れる川、谷川。○うは波 表面的な波。六帖にも素性集にも「うは波」とあるが、流布本には

「あだ波」とある。

【大意】 限りもなく深い淵は波が立たうか立ちはしない。谷川の浅い流にこそは、上つ調子な波が立つのだ。といふのが表の意で、裏の意は、本當に深く思つてゐる人は、其を表面に現はしたりはしないものだ。仰山らしく表面に現はして思つてゐるとか何とか云ふ人は、實は深く思つて居ないからなのだ。

○ 河原左大臣

みちのくのしのぶもぢずり誰故に亂れそめにしわれならなくに

【語釋】 ○みちのくのしのぶもぢずり。「亂れ」にかゝる序詞。「しのぶ」は信夫。岩代國にある地名。「もぢずり」は振措で、

草の莖葉を布帛の上に置いて色々の色に摺つたもので、その紋様が亂髮の様に、交錯してもちれてゐるので云ふ。陸奥の信夫

の振措の意。○亂れそめにし 心が戀の爲に亂れ初めた。流布本には「みだれむと思ふ」とある。これに従ふと意味が大分違

ふ。

【大意】 (初二句は序詞) 誰の故にも心が亂れそめたのではない。あなた故に心が亂れそめたのです。(第四句を「亂れむと思ふ」に従ふと、他の誰の故に心を亂さうと思ひませうか、みんな貴方故です) この歌百人一首に入つてゐる。但し第四句は「亂れそめにし」となつてゐる。

○ 伊 勢

わたつみとあれにし床を今更にはらはゞそでや泡とうきなむ

【語釋】 ○わたつみと わたつみの如く。「わたつみ」は遊。○はらはゞ 拂ふなら。塵を拂ふなら。○泡とうきなむ 泡の

如く浮くであらう。

【大意】 あなたが長く來られないから、獨り寝の悲しさに海の如く、荒れてしまったの床を、今更になつてあなた

が来られると云つて、拂ふならば、袖が泡の様に浮く事でしょうよ。誇張した歌である。

○

右のおほいまうちぎみ、住ますなりにければ、かの昔おこせたりけるふみどもを、とりあつめてかへすとて、よみておくりける

内侍典 藤原因香

たのめこしことのはいまはかへしてむ我身ふるればおき所なし

【語釋】 ○右のおほいまうちぎみ 右大臣。「おほいまうちぎみ」は大匠のこと。「おほい」は大の意、尊稱。「まうちぎみ」は

「まへつきみ」の音便。「まへつきみ」は天皇の御前に侍ふ高位高官の人の意。こゝの右大臣源能有のこと。 ○住ますなりにけ

れば 男が女の所へ夜毎に通つて、夫婦關係を結ぶのを「住む」と云ふ。男が通つて来なくなつたから。夫婦の縁が切れたから。

○たのめこし 「たのめ」は頼みに思はせるを云ふ。「こし」は来た。今まで頼ませて来た。(元永本には「たのめけむ」とあるの

であるが、「けむ」では意味が通じ難いから、流布本に従つておいた。) ○かへしてむ 返へしてしまはう。「返へしてむ」の

「て」は過去の助動詞「つ」の將然形。「む」は未來の助動詞。 ○我身ふるれば 我身が舊されたから。

【大意】 右大臣が、自分と縁が切れたから、以前に自分に寄せた手紙等を、集めて、返へす時に詠んで送つた歌。

——今まで頼みに思はせて来たあなたの愛情のこもつた手紙をもうお返へしてしまひませう、私はあなたに舊さ

れたから、こんな手紙は置いておく所がありませんから。

○

題 不知

讀人しらず

かたみこそ今はあだなれこれなくば忘るゝ時もあらましもものを

【語釋】 ○あだ 仇の意。 ○あらましもものを 「まし」は推量の助動詞。あるだらうものを。

【大意】 戀しい人の残しておいた形見が、今となつては却つて仇となつた。この形見が無かつたら。忘れてゐる時

もあるだらうのに。(形見がある爲に、いつも思ひ出しては悲しい思ひをせなければ成らない)——(この歌伊勢物

語に出てゐる。)

古今和歌集 卷第十五

戀 五

五條の后宮ついでの、西の對にすみける人に、ほにはあらで、ものいひわたりけるを、正月の十日あまり許ゆるぎになむ、外へかくれにける。ありどころは聞きけれど、えものもいはで、またのとしの春、梅花うめはなさかりに、月のおもしろかりける夜、去年をこひて、この西の對にいきて、月の傾くまで、あばらなる板敷にふせてよめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔のはるならぬわが身ひとつはもとのみにして

【語釋】 ○五條の後 宮藤原冬嗣の女の順子 仁明天皇の皇后。 ○西の對にすみける人 西の對の屋に住んでゐた人。后宮の姪に當る人で、藤原高子、清和天皇の女御になられた人で二條の後と云はれた人。「西の對」は寢殿造りの邸宅では、中央に南面して寢殿があり、その東西に「對の屋」と云ふ一棟がある。——寢殿とは廊下で接続する。西の方にある對の屋を西の對と云ふ。

○ほにはあらで 「ほ」は表面、公。公然とではなく。流布本には「ほいにはあらで」とある。「ほい」は本置。○ものいひわたりける 戀愛關係を結んだ。○えものもいひで 訪れることも出来なくて。あばらなる板敷。荒れた板敷。○月やあらぬ 「や」は疑問詞。この句は反語になる。月は去年と同じ月ではないか、同じ月だ。○春や昔のはるならぬ 春は去年と同じ春ではないか、同じ春だ。○わが身ひとつはもとの身にして 自分の身だけは、去年と同じであつて、然も同じ身の上ではないの意。

【大意】 五條の後宮の邸の西の對に住んで居た女に、こつそり、契を結んでゐたが、正月の十日頃に、その女が姿を隠してしまつた。隠れてゐた所は聞いたけれど、訪れる事も出来なくて(月日を経)、翌年の春、梅の花が盛りで、月の美しかつた夜、前年の女との契を慕はしく思つて、この西の對へ行つて、月が傾くまで、荒れた板敷に寝ころんで、以前の事を追懐して詠んだ歌。——月は去年と同じ月ではないか、同じ月だ、春は去年の春と同じ春ではないか、同じ春だ、然も自分の身だけは、去年と同じ身でありながら、境遇は全く變つてしまつた。

うきめのみおひて亂る、浦なればかりにのみこそあまはよるらめ

【語釋】 ○うきめ 浮き海布、に憂き目をかけてある。 ○おひて 生えて。 ○亂る、 流布本には「流る」とある。 ○浦 入江。自分に譬へてある。 ○かり 刈り、と假にかけてある。 ○あま 海人と、自分の所へ通つて来る男にかけてある。 ○讀人しらずの歌。

【大意】 (表の意味は——浮き海布ばかり生え繁る浦だから海人が刈りにばかり寄るのであらう。と云ふのであるが、裏の意は)憂くつらい目にばかり會つて居る自分だから、思ふ人が来てくれるのも、唯かりに一寸来るだけなのだらうよ。

題知らず

讀人知らず

須磨のあまの鹽やき衣をさをあらみ間遠にあれや君が來まさぬ

【語釋】 ○須磨のあまの鹽やき衣をさをあらみ。この三句次の「間遠」の序詞。「鹽やき衣」は鹽を焼く者が着る粗末な着物。○をさをあらみ をさ(箆)は機を織る時に、たて糸を通すもの。箆を粗くすれば、織物は粗になつて、織目は間遠になる。「あらみ」は粗いから。粗い故に。 ○同遠にあれや。間遠である故か。間遠は間隔の遠いこと。こゝは住居の隔つて居ること。

【大意】 (初三句は序詞) 住居が遠く隔つてゐるからだらうか、待つても待つてもあなたは來て下さらない。

あかつきの鳴なのはねがきもゝはがき君が來ぬ夜は我ぞかずかく

【語釋】 ○あかつきの鳴のはねがきもゝはがき 鳴は曉方に特に屢々羽をつかふ。(羽を嘴でしごいて調へる)ので曉の鳴の羽振はねふりき云ひ、語を重ねて「百羽掻き」と云ふた。 ○かずかく 歎きもだえて輾轉する。この歌は同音の語を多く用ゐてゐる爲に非常に調子がいい。

【大意】 曉の鳴は屢々羽をつかふが。君の來ない夜は私が歎きもだえて輾轉する。

兼 藝 法 師

もろこしも夢にみしかば近かりき思はぬなかぞはるけかりける

【大意】 唐土も夢に見たから思つたより近いものであつた、が相ひ思はぬ間からは、夢にも見ないから、遠いものであつた。

【餘言】 實際上遠い距離にある唐土と、近い愛人とを比し、夢に見るか否かに依つて、精神上の遠近を比較したものである。

題 知 ら ず

讀 人 知 ら ず

來めやとは思ふものからひぐらしのなく夕暮はたちまたれつゝ

【語釋】 ○來めや 來はしないだらう。 ○思ふものから。思ふけれども。 ○たちまたれつゝ 「たち」は接頭語。立つて待つまちの意ではない。

【大意】 來はしないだらうとは思ふけれども、朝の鳴く夕暮になるこゝ、やはり心待ちせられる。

兼 覽 王

住の江のまつほどひさになりぬればあしたづの音に泣かぬ日はなし

【語釋】 ○住の江のまつ。「住の江」は住吉。「まつ」は松と待にかけてある。住吉の松は老木として有名である。 ○あしたづの。「音に泣く」の枕詞。「あしたづ」は芦鶉の意 鶉うしの事。 ○作者兼覽王は惟喬親王の御子。正四位延長三年に宮内卿になられた方。

【大意】 住吉の年を経た松程、久しい間待つてゐる身は、悲しさに聲を出して泣かぬ日はなし。

心地そこなへりける頃、あひしりて侍りける人のとはで、心地おこたりてのち、訪へりければ、よみてつかはし

ける。

しての山ふもとよりのみ歸りきぬつらき人よりまづ越えじとて
兵衛

【語釋】 ○心地そこなへりける頃 病氣になつてゐた頃。 ○とはで 訪れないで。 ○心地おこたりてのち 病氣がなほつて後。 ○しての山 佛教で死を重大な時期と見、此を山に譬へて説いたのが、誤り傳へられて死んでから次の世へ行く途中に死出の山と云ふ山がある如く云はれる様になつた。こゝは其の山があるとして詠んでゐる。 ○ふもとよりのみ歸り來ぬ 流布本には「ふもとをみてぞ歸りにし」とある。同じ意である。死出の山を越えないで、再び此世へ歸つて來たの意。一度死にかゝつて癒つた事を云ふのである。 ○つらき人 同情のない人。無情な人。 ○まづ越えじ 先には死出の山を越すまい。死ぬまい。 ○作者兵衛は右兵衛藤原高經の女。

【大意】 自分が病氣をしてゐた頃、前から親しくして居た男が、見舞に來ずに、病氣が全快してから訪れて來たので詠んで送つた歌。——私は死出の山の麓まで行つたけれど、(死にかけたけれど)山へは登らずに歸つて來ましたよ、同情のないあなたより先に、あの山を越えたくはないと思ひまして。(薄情なあなたより先に死に度くは無いと思つて)——氣持よく皮肉つた歌である。

○ 讀人知らず

あはれとも憂しとも物を思ふ時などかなみだのいとながるらむ

【語釋】 ○あはれ あゝと心に感ずること。 ○いとながるらむ ながるらむに流れるをかけてある。いとほ間なくの意。(後撰集に「春の池の玉にあそぶには鳥の足のいさなき戀もするかな」と云ふのがある)

【大意】 あゝと感ずる時にもつらいと思ふ時にも、何故暇なく涙が流れるのであらう。

○ 題知らず

伊勢

人しれずたえなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはいはましものを

【語釋】 ○たえなましかば。「な」は過去の助動詞「ぬ」の將然形。「まし」は推量の助動詞。絶えてしまふならば、○なき名ぞとだにいはいはましものを。事實無根の噂だとだけでも云はうものを。「ば」とありましとあるので反對の意になる。

○ 讀人知らず

それをだに思ふ事とてわが宿を見きとないひそひとのきかくに

【語釋】 ○それをだに それ位の事だけでも。「わが宿を見き」に係る。 ○思ふ事とて 私の願として。お願だから。 ○ひそ

のきかくに「かく」は「く」の延言。人が聞くから。
【大意】 それだけでも、即ち私の家を見たといふ事だけでも、お頼だから人には云はないで下さい。人が聞き耳を立て、私達の関係を感じ付く様になるから。

磯邊よりくもみをさしてゆくかりのいや遠ざかるわがみかなしも

【語釋】 ○磯邊より 流布本には「あしべ」とある。 ○くもみ 大空のこと。雲の居る所の意。 ○磯邊よりくもみをさして行く 雁の。この三句は、次の「いや遠ざかる」の序詞。 ○いや。いよく、ますく。 ○遠ざかる 「さかる」は離れる事。遠く離れる。 ○頼人しらずの歌。

【大意】 (初三句は序詞) 思ふ人との間がいよ／＼ますく／＼遠くなつてゆく自分の身は、悲しい事だ。

小町

秋風にあふたのみこそ悲しけれわが身むなしくなりぬとおもへば

【語釋】 ○秋風にあふたのみこそ悲しけれ。「たのみ」は稻の實、と頼みにかけてある。「田の實」は米の意。因に「頼み」は「むなしく」に係る。 ○わが身。身に實がかけてある。

【大意】 (表の意は——秋風に逢ふ稻は、まことに悲しい。百姓が頼にして居る實が空しくなつてしまふと思ふ

——終り——

昭和十年 二月十五日印刷
昭和十年 二月二十日發行

國文學大講座 第一二

古今和歌集選釋

定價一圓八十錢

釋選集歌和今古	
編輯者	國文學大講座刊行會
發行者	代表者 吉川與志次
印刷者	吉川 與 志 次
	東京市神田區小川町三丁目二四

◇發行所
東京市神田區小川町三丁目二四
日本文學社

筆執家大門專各 座講大學文國

◇近世和歌史	◇國文學問題詳解	◇王朝文學概論	◇新古今和歌集講義	◇俳句選釋	◇有職故實	◇謠曲講義	◇言語學概論	◇文法及口語法
東京文理大教授・能勞朝次著	京都女專教授・田中健三著	文學博士吉澤義則著	女子學習院教授・佐成謙太郎著	京大助教・穎原退藏著	風俗研究所長・江馬務著	東京文理大教授・能勢朝次著	文學博士・新村出著	奈良女高師教授・木枝増一著
送價菊料 二二三 四四五 十二	送價菊料 二二三 四五八 二十	送價菊料 二一二 四〇八 二十	送價菊料 二一二 四一八 二十	送價菊料 二二三 四二五 二十	送價菊料 二二三 四三五 二十	送價菊料 二二三 四三三 二十	送價菊料 二二三 四一八 二十	送價菊料 三四六 五五六 十二

筆執家大門專各 座講大學文國

◇古今和歌集選釋	◇平家物語講義	◇枕草子選釋	◇源氏物語講義	◇萬葉集選釋	◇古事記選釋	◇國語學史	◇國文學史
文學博士・尾上八郎著	東京女高師教授・石川佐久太郎著	三高教授・島田退藏著	奈良女高師教授・岩城準太郎著	京大助教・澤瀉久孝著	三高教授・阪倉篤太郎著	文學博士吉澤義則著	文學博士・藤井乙男著
送價菊料 二一二 四一八 二十	送價菊料 二一二 四一八 二十	送價菊料 二二四 四一五 二十	送價菊料 二二四 四〇八 二十	送價菊料 二二二 四一八 二十	送價菊料 二二三 四一八 二十	送價菊料 二二四 四〇八 二十	送價菊料 二二三 四一五 二十

◎本書は嘗て本會に於て出版して噴々の好評を博し本書のみによつて文檢に合格した篤學の士數百、引續き本會は續國文學講座江戸文學講座を出版しましたが國文學大講座は三書の内特に文檢受験者必須なるものを選択統一したものである。

筆執家大門專各 座講大學文國

<p>◇江戶文學概說</p> <p>文學博士藤井乙男著</p> <p>送價菊料判 二二八 十 二 錢錢頁</p>	<p>◇更科、泉式部、紫式部 日記講義</p> <p>宮田和一郎著</p> <p>送價菊料判 二二四 八 十 五 錢錢頁</p>	<p>◇西鶴五人女評釋</p> <p>鈴木敏也著</p> <p>送價菊料判 二二三 八 十 二 錢錢頁</p>	<p>◇大鏡增鏡鏡類選釋</p> <p>金子原亮、堀江秀一、荒瀬邦秀著</p> <p>送價菊料判 二三五 六 十 八 錢錢頁</p>	<p>◇保元物語大平記選釋</p> <p>清水藤清、齋藤泰衛著</p> <p>送價菊料判 二二三 五 十 八 錢錢頁</p>	<p>◇徒然草講義</p> <p>金子彦二郎、女高師教授、木枝增一郎著</p> <p>送價菊料判 二二二 九 十 〇 錢錢頁</p>	<p>◇江戶時代風俗史</p> <p>風俗研究所長 江馬務著</p> <p>送價菊料判 二二二 八 十 六 錢錢頁</p>
--	--	---	--	--	--	---

日本の性格の文化の発展

910.8
K_o45
(12)

終